22

平成７年10月５日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（二〇）

第四二則　南陽浄瓶

〔示　衆〕

衆に示して云く、鉢を洗い瓶に添うるも尽くこれ法門仏事、柴を般い水を運ぶも妙用神通にあらざることなし。なんとしてか放光動地を解せざる。

〔本　則〕

挙す、僧、南陽の忠国師に問う、いかなるかこれ本身の盧舎那。（汝、あにこれ名を替うるや。）国師云く、我がために浄瓶を過ち来れ。（話頭を忘ることなかれ。）僧、浄瓶をもって至る。（錯認を得ることなかれ。）国師云く、却って旧処に安んぜよ。（重ねてこの義を宣ぶ。）僧また問う、いかなるかこれ本身の盧舎那。（なんの処にか去来す。）国師云く、古仏は過ぎ去くこと久し。（ここを離ること遠からず。）

南陽とは、中唐の南陽慧忠国師（六八九～七七五）のことです。この方は、すでに第七回に第八五則「国師塔様」で紹介したように、六祖慧能の法嗣です。南陽（河南省南陽市）の白崖山香厳寺に住すること四〇年、後に長安の都に招かれて粛宗と代宗の二帝に道を説いた高僧です。

この本則は、慧忠国師と一僧とが「本身の盧舎那」をめぐる問答なのですが、ふしぎなことに古い文献では、これが馬祖の法嗣である塩官斉安と一僧との問答となっていて、慧忠国師は粛宗の「いかなるかこれ十身調御」の問いに対して「老僧がために浄瓶を過ち来れ」と答えた、とされているだけです。これは、おそらく『従容録』の編集者がこの二つの問答を混同して、「南陽浄瓶」としてしまったのではないかと思われます。

でも、だれが主役であっても、この則がすぐれた深い禅旨を示していることに、変りはありません。ここでは文字どおり、慧忠国師の教示した則としてみておきましょう。

さて、万松和尚の〔示衆〕は、「鉢を洗ったり浄瓶の水を汲んだり、柴をにない水を運ぶなどの日常動作は、すべて仏法であり仏祖の妙用なのだが、この道理がなぜわからん

のじゃろう」といったほどの意味です。「放光動地」とは諸仏の妙用のこと。

日常の生活体験を正しく行うのが道であり仏法であって、そのほかに特別な仏法などないというのが禅の立場ですが、これは頭では理解できても、体験的には自覚できないものです。坐禅のときはともかく、洗面・食事・作務などのとき、一々仏行を行じているなどと思ってはいませんね。なぜでしょう。まあ、その前に本則をみることにします。

現在の香厳寺大雄宝殿

〔本則〕のあらましを、例によって意訳しましょう。

僧「本身のルシャナとはどんな仏さんですか。」国師「あの浄瓶を持ってきてくれんかね。」僧が持ってくると、国師「またもとの所に置いてきてくれ。」僧「本身のルシャナ仏とは？」国師「たった今は活動していたのに、もう遠くへ行っちゃったワイ。」

禅問答は木に竹をついだようだといわれますが、まさにその典型ですね。国師が、頭で理解しようとする僧に対して、わざと行動で会得させようと教導するために、問いと答えが一見つながらないように感じるのです。

中心テーマは本身の盧舎那。本来だれでも身に具わっている光明、仏としてのいのち、といった意味です。具わってはいても、妄想や分別の雲がかかっていると、その光はさえぎられて他を照らすことができない。それがわからないから、僧が国師にたずねた。これを万松は「君がその仏なのに、いつ改名したのだ」と面白いコメント。

国師は僧に浄瓶を持って来させた。浄瓶とは手を洗い口をすすぐ浄水入れの器です。僧はいわれたとおりに瓶を持って来た。万松の「浄瓶をルシャナと間違えるなよ」のコメントは、僧に対する老婆親切。ところが、国師はすぐ瓶をもとに戻せという。これに対する万松のコメントは、「重ねて説法なさって何と親切なことよ」と国師をほめたたえています。

つまり、瓶を持って来させ、また元に戻させた、という二つの行為がそのまま説法だというのです。こんなありふれた業務や動作を正しく行うところに、本身のルシャナがたちどころに現われる道理を、国師は僧に体得させようとしたのですね。

ところが僧はまだわからず、ふたたび同じ質問です。さすがに万松も「いったいどこをウロウロしているんじゃ」と手きびしい。国師は僧に、いま仏のいのちが活動していたのにもう遠くへ行っちまった、と三たび教える。「古仏が過ぎ去く」とは、ルシャナが離れていくという意味。万松の「そんなに遠くまでは離れておるまい」は、ただ僧のルシャナが迷妄分別の雲にさえぎられているだけなんだ、といいたいのです。

字句の詮索はともかく、この則は平凡な日常生活の中に厳然として道があり仏のいのちが活かされることを教える点、第三九則の「趙州洗鉢」と双璧であります。

わたくしは、学生時代に沢木興道老師から坐禅の指導をいただきましたが、あるとき老師は口宣（くせん）の中で、「君たちの歩き方は率暴きわまりない。いやしくも禅を学ぼうとする者は、洗面は静かに、便所はキチッと使い、風呂は何人入ってもキレイなように使うのが道というものだ。」といわれました。当時は、禅とはなんと厳しく堅苦しいものかと感じましたが、洗面はもちろん、風呂をつかっても水音を立てなかったという沢木老師の日常生活が、いかに平常是道に貫かれていたことかと、後になって痛感しました。

ふりかえって、わたくしたちはいかに日常生活をおそまつにしていることでしょう。わたくし自身、いささか広すぎる境内の清掃を四〇年あまりもひとりでやってきましたが、道にかなうところがどれほどあったか、忸怩たる思いです。

老師にはなぜ平常是道の生活ができたのでしょうか。それは道心であります。まっさらな志に貫かれていたからこそ、立処これ真となり、人を打つ力があったのです。

わたくしたちは、教えを頭につめこむのではなくて、身体全体に活かせるような人生でありたいと思います。そのためには、本則のような教えをかみしめ、大切にしていかなければなりません。

二祖慧可大師の耳（その三）

―雪舟筆「慧可断臂図」雑感―

松戸市　小畑　節朗

禅の伝灯祖師像に略伝や賛語を付した書物はあるのであろうか。

実は、七九年に我が椎名老師が『曹洞宗報』七月号に「六祖慧能大師研究余論」を発表され、五種類の仏祖系統図関係の禅書を挙げられており一番年代の早いものには北宋時代の一〇六一年に佛日契嵩によって著わされた『伝法正宗定祖図』を示されておられる。

それは「西天二八祖・東土六祖の伝法祖師について、それぞれ伝法の絵図と略伝とをつらねたものであったが、いつしか絵図を削除した文章だけが一般に流布することになり、明版大蔵経や、下って大正大蔵経などのテキストでは貴重な絵図はみられなくなっている。ただ中国で永楽年間（一四〇三―二五）に刊行されたテキストや、日本で刊行された五山版や古活版の系統、および京都東寺観智院旧蔵巻子本などには絵図が保存されている。」としておられるが、初祖・二祖間の伝法図はこの「断臂図」の如きものではないとのご教示であった。

『正法眼蔵』「仏性」巻に道元禅師入宋、諸山歴遊の時、阿育王山の西廊の壁間に西天東地三三祖の変相が描いてあった。その中第一四祖龍樹尊者の一面に「身現円月相」すなわち月のような円い形を描いてあったとある。

禅師は嘉定一六年（一二二三）の秋と宝慶元年（一二二五）の二度訪れて「仏性」の巻の大きなテーマとして「身現円月相」を従横に拈提されておられるが、『眼蔵』の本来的性格上、地の変相への言及は一切ないのである。

昨年（一九九四）至文堂より刊行された『日本の美術』三三五号「雪舟」で、渡辺明義氏はこの「断臂図」の先例は戴進筆「達磨六代祖師図」のような図からヒントを得てるに違いないとしている。

戴進は字を文進、明の洪武二〇年（一三八七）生まれの銭塘の人で明初を代表する画家で天順六年（一四六二）に没している。

この図は中国遼寧省博物館蔵で「達磨六代祖師図巻」中にあり鈴木敬氏の『中国絵図史』下によるとこの図巻はもと清朝内府にあったもので、祝允明、唐寅等の跋が付されているとのことである。

戴進の人物像を見る上でも重要であり、初祖の記名をはじめ唐土二祖慧可大師から唐土六祖慧能大師にいたる六代の祖師像を正面観だけでなく、各様の姿態に描いた所に持色がある。その点元代以前の肖像、頂像とも違っている。としている。

全くの推定にしか過ぎないが中国の宮廷、あるいは禅院において、西天東土三三祖とか東土六祖の変相はある程度一般的に流布しており明代もその流れにあったのではあるまいか。

雪舟の入明は応永二七年（一四六六）であるので、その四年前に戴進は他界していた。

（つづく）

達磨六代祖師図巻（部分）遼寧省博物館蔵

泊禅特

感銘深い〔可睡斎〕一泊参禅会

今年の一泊参禅会は六月一七・一八日、東海の禅刹可睡斎様にて行われました。

当龍泉院では、毎年八月一六日に大々的な施食会が如法されますが、中野東禅老師の法話も恒例行事となっております。

その中野東禅老師が、可睡斎様の後堂をお勤めになっておられたご縁のお陰さまで、今回の一泊参禅会行が実現いたしました。

可睡斎本堂前での記念撮影

時あたかも牡丹祭りを記念しての「可睡斎寺宝展」の真っ最中で、寺院内は参拝客で大変な賑わいでした。しかし、そんな中にもかかわらず担当僧の方々は大変親切な応対をしてくださいました。深謝。

当日は、椎名老師に導かれて二四名の会員が参加され、以下の差定に従って如法。

六月一七日（土）

上　山　午後三時
禅　講　午後三時三〇分
薬　石　午後五時
夜　坐　午後七時
開　枕　午後九時

六月一八日（日）

振　鈴　午前五時
暁　天　午前五時二〇分
朝　課　午前六時
小　食　午前七時
作　務　午前八時
坐　禅　午前九時
禅　講　午前一〇時
坐　禅　午前一一時一〇分
中　食　午前一二時
下　山　午前一二時三〇分

禅講は、平成三年の一泊参禅会より開始された椎名老師ご提唱による「典座教訓」の五回目。

今回は二五～二八段で、典座教訓の中核をなす素晴らしい箇所。

道元禅師二四歳の時、正しい仏法を学ぶため中国へ渡り、そこで愛育王山の老典座との劇的な出会いをする。

道元禅師と老典座との問答は、仏法の真髄そのもの。

道元禅師の求道心が発する「如何にあらんか是れ文字」「如何にあらんか是れ弁道」の問い。

老典座が答える。文字は「一二三四五」、弁道は「徧界曽て蔵さず」。前者は、根本が大事だという意。後者は、宇宙は何も隠れていない目の前に無限に現れている。生きること自体が道、即ち毎日の生活が道そのものであるとの意。

ご提唱くださった椎名老師は、最後に、雑念妄想が混じっていたり小さな自我に執らわれていてはならない。天地宇宙万物の心に叶っていなければならない。真剣な坐禅修行こそが、その心を養ってくれると結ばれました。

日々刻刻の瞬間を、常に行そのものの心で処していなければならないことを深く感じ入りました。

今一泊参禅会行実施に当たって椎名老師と中野東禅老師の深いご縁に感謝すると共に、ご尽力くださいました小畑幹事、年番幹事の方々に厚くお礼申し上げます。

合掌

一参会集

可睡斎本堂　　可睡斎僧堂

一泊参禅会に参加して

柏市　佐野　明子

今回、可睡斎の一泊参禅会に参加できました事を、大変有り難く、又嬉しく思っております、御老師様始め、幹事様、参加されました皆々様には、大変お世話になりまして、有り難うございました。心より厚くお礼申し上げます。

参禅会に参加しておりますゆえに、曹洞宗屈指の名刹、可睡斎に参拝することができました。坐禅堂を始め、大広間、鶴の間のボタンや鶴の襖絵、日本一のお手洗い「東司」等々、目を見張るものばかりでございました。翌朝四時に目が覚め、境内を散歩し、深閑と静まり返る中に、キツツキのコツコツと木をつつく音が、あたりに響きわたり、しばし、耳をかたむけておりました。

五時半に朝の坐禅が始まり、ニワトリ、スズメの声を聞きながら、すがすがしい気分で坐る事ができ、そのうえ、何人かの雲水の方々もご一緒でしたのでより一層この坐禅が印象強く心に残っております。

お昼にいただきました精進料理は、美味しく品数も多く、これだけ沢山の品数を作られるのはさぞかし大変のことと感謝いたしながら、いただきました。今回可睡斎に無事行ってこられましたのも、多くの方々のお陰と感謝いたしております。有り難うございました。来年の一泊参禅会にも是非参加したいと今から楽しみにいたしております。

一泊参禅の印象

柏市　安本小太郎

二年ぶり、遠出の一泊参禅会で印象に残ったことは多々あった。

帰り車中での般若湯入り話し合い、白木を中心とした造作の立派さ、高村光雲作の大きな烏蔦沙摩明王と東司、本格的僧堂での五炷の坐禅、椎名老師の典座教訓提唱等である。

僧堂での坐禅は暖かさと眠気で満足のいくものではなかったが、大開静（だいかいじょう）はよいものであった。

特に二日目の典座教訓における、若き道元と老典座の再会で、言葉の表す本当の意味を獲ること。仏道とは日常生活にあり、体現されるべきものとの教えは厳しかった。

その例として話された、仙桂和尚は野菜を作って、修行僧に施す以外、仏法も語らず、坐禅もせずの弁道の話は、皮膚から入ってきたようであった。四炷の坐禅の所為であろうか。これ仙桂和尚の悟後の修行であると聞いて安心した。

人間の尺度から仏、菩薩の尺度へ、生活の中の仏法から、仏法の中の生活へ、坐禅を続けたいと思う。

夢の国での一泊参禅

柏市　高野千代子

今年の一泊参禅は、静岡県袋井市の可睡斎とのこと、聞き馴れないお寺の名前に私の好奇心はそそられ、日に日に期待する想いが広がってまいりました。到着したそのお寺のすごいこと、今ではあまりお目にかかることの少なくなった日本文化の殿堂でした。外側はけっして綺羅美やかではありませんが古い美しいものを、手をかけ、心をかけて大切に保存し保ち続ける日本人の本来の心が隅々まで行き渡っておりました。私達女性五人は、瑞龍閣の鶴の間に休ませていただきました。大きな鶴が羽を広げて、美しく舞う大きな襖に囲まれ、正に夢の国での一晩でした。見ても見ても見あきない、広い部屋の襖絵はその見事さを充分堪能させていただきました。

椎名老師のご提唱「典座教訓」は、豊かさに馴れ切った私の心に、警策をもってその眠りを覚ますすごいご提唱でした。その昔、一二二三年、中国に渡られた道元禅師が、そこで縁をえた中国の老典座禅師より学んだ典座という役の真髄である言葉

「吾れ、老年にこの職を掌(つかさ)どる。乃ち耄及(もうぎゅう)の弁道なり。何を以ってか佗(た)に譲るべけん乎。又来る時未だ一夜宿の暇(か)を請わず」。

老いてなおかつ、典座の役に弁道の道を求め求めて修行する姿、その言葉に感動する若き道元禅師のお姿がほうふつとして重なり私の瞼に写る思いでございました。

そして、夜の静寂のひと時、うす暗い坐禅堂で行われた夜坐の二炷も、慌ただしかった一日の締め括りとしてゆったりとした時の流れるままに身をまかせた坐禅でした。その終わりに、皆さんと一緒に誦した「普勧坐禅儀」のゆっくりと流れる堂内は、皆さんとご一緒に坐らなくては得られない感動の一駒でした。

椎名老師による禅講

この頃、しみじみ思いますことは、余生のだんだん少なくなってまいりました私にとりまして、やりたいと思うことは、ためらわずやって見よう。途中でやれなかったら、ひき返したらいいではないかということです。そして、今年の四月と五月の二回で四国の八八ヶ所遍路の旅にも参加いたし、六三ヶ寺巡ることができました。残りは一〇月です。少なからずあった逡巡をぬぐいさって第二の青春と思っております。そして、いただいたさまざまなご縁がまた私の人生に充実と感動をいただきました。

今回の一泊参禅も素晴らしいご縁でございました。改めて椎名老師はじめ立案に参画して下さり、ご苦労いただきました幹事さんに心より感謝申し上げます。

一泊参禅会に参加して

柏市　牧野　洋子

一九九五年六月一七日。午後七時過ぎ、うす明かりの坐禅堂に坐して、私は不思議な思いの中にいた。

「普勧坐禅儀」―「諸縁を放捨し、万事を休息して、善悪を思わず、是非を管すること莫れ」

〈日常の生活においては、親、兄弟、子、その他周りの人々、皆に支えられて、お陰さまで生きているが、今、これら諸縁を全て忘れ去って、ただ一人坐るべし―〉というようなご老師のお声が滔々と堂内に響いた。私は、はっとして身の引きしまる思いだった。そして、深夜のような静けさの中で、〈私はたった独りである〉という、深い深い感覚がひたひたと押しよせてきた。

この大宇宙の中で、一個の生命をいただいている私という小さな存在―。

夜の沈黙(しじま)の深淵に坐して、自分という一個の頼りない存在と向き合って、人間は真に独りの存在である、という自明のことが、ひしひしと体得され、それでも動ぜず坐っている、もう一人の自分を視ていた。

それは、深い山奥にこもって坐っていて、ひどく恐ろしいような、そして、深い豊かさに満ちているような―不可思議な感覚でした。

「典座教訓」ご提唱の折には、椎名ご老師を通して、いろんな人に出会うことができました。

若き道元さん、阿育王山の典座さん、良寛さん、そして仙桂さん。

仙桂和尚は真の道者。
黙して言わず朴にして容らず
三十年國仙の會に在りて
参禅せず、読経せず
宗文の一句も道わず
園菜を作って大衆に供す

ああ、仙桂和尚さんのようになりたい―と切に思いました。

しかし、それまで、どれだけの修行を積まねばならないことでしょう！

幹事さんに無理をお願いして、それはそれは美しい、たくさんの百合の花にも会えました。

樹や草花といつもおしゃべりしたり、気をもらったりして、生きとし生けるものの生命というものを身近に教えてもらっている私にとって、その時分の生命を輝かせて咲いている花たちに出会えることは、仏様に出会ったような喜びです。

人と人、人と自然との出会いは、いつも一期一会。移ろいゆく者同士が、今、この一瞬、天地の間に存在し合っている有り難さ。ただ無心に手を合わせたくなります。

あっという間の二日間でしたが、本当にいろいろな貴重な体験をさせていただきました。椎名ご老師様、幹事の方、本当にありがとうございました。

澄心静慮

我孫子市　清水　秀男

可睡斎僧堂で参禅するのは私の学生時代からの願いでした。理由は学生時代に、可睡斎僧堂第五一世師家「高階瓏仙」老師の御文章「坐禅は煩悩の抜本治療」、「生と死の解決」に接し、高階老師縁の名刹に参禅し今はなき老師の迸る禅の息吹に接したいと思っていたからです。

それから三三年が経過し夢が実現できました。これも椎名老師初め参禅会のお歴々のご因縁が有ったからだと改めて、法縁の不思議さと素晴らしさに感謝あるのみ……合掌。

噂に違わず名刹で、坐禅、作務を通じて脈々と息づく「禅」の命に触れた思いがします。

「禅」て何だろうと考えた時、むずかしい理論は別として私は、日常生活の毎日毎日を如何に十全に生きるかに尽きると思います。凡事徹底すること、当たり前の事をありのままに行じ続けて行く事以外にないと思います。まさに無門関第七則「趙州洗鉢」だと思います。

又椎名老師に提唱して頂いた、「典座教訓」の中で用典座が道元に言った「佗は是れ吾に非ず」「更に何れの時をか待たん」の言葉も、このあたりの消息を端的に述べたものと思います。

全身全霊をかけて今日只今を行じて行く時、大宇宙の大生命と一体となることができ、そこから本当の生命力が、命の輝きが生まれ出、真に魂を根底より動かす事ができるのではないでしょうか？本当の幸せとはその中にこそあるのではないでしょうか？

坐禅はこれらの事を気付く為に、心の浪を静め物事の本当の姿を体で体得するために、行ずるのだと思います。

禅は自分の中に、ありのままに受け入れる力が有り、自分を変えて行く力も有り、それらを見分ける知慧が本来人間に有る事を気付く教えだと思います。

そして刹那の現実を十全に生きる事が、生死を超えて過去を生かし、未来を充実する事だろうと思います。（「生や全機現、死や全機現」）

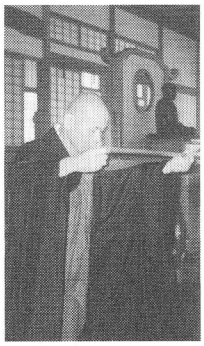
即今只今に生きる事を通じて、私のちっぽけな命が間断なく燃え続け、たとえ細い光であっても周囲を少しでも明るくする様努力したいと、可睡斎僧堂参禅を通じ思いを新たにした次第です。

「過去を追わざれ、未来を願わざれ、……ただ今日まさになすべきを熱心になせ、誰か明日の死あるを知らん」（中部一三一、一夜賢者経より）。

可睡斎一泊参禅会に参加して

柏市　今泉　章利

朝の九時過ぎに神戸の長田の社宅を出発。普通電車を乗り継ぎ、袋井の可睡斎に着いたのは二時を少し廻った頃でした。山門を入り大きな杉の木立で暗い急な石段を一気に上りつめると、突然、明るく大きな庭が広がり、いかにも名刹らしい本堂が見えました。本堂に向かって進んでゆくと、五、六メートルはあろうかと思われる供養塔が建っており、「大圓鏡智為阪神大震災遭難物故者諸精霊位供養塔」の文字が眼に飛び込んできました。



僧堂での椎名老師

阪神大震災では五千五百人の方が亡くなりましたが、私の住んでいる長田でも八百人近い方が亡くなり、あの地震直後の光景がふと心によみがえりました。

聞き覚えのある声に後ろを振り向くと、カメラを持った杉浦さんが、続いて御老師、小畑さん、森岡さん、高野さんと懐かしい顔がどんどん見えます。早速、ご挨拶申し上げましたが、何か、本当の故郷の人達に会う以上の嬉しい気持ちがこみあげてきました。

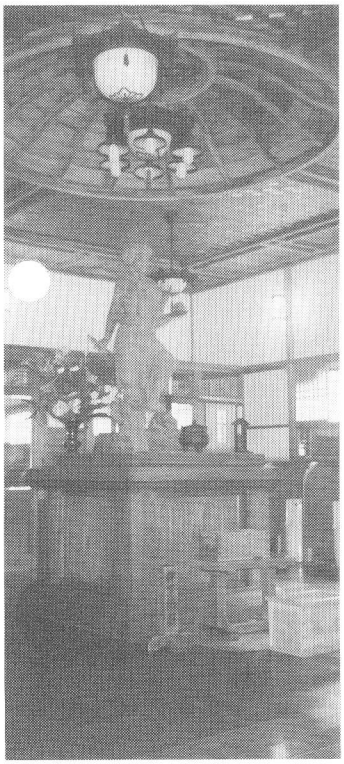
上山の手続きを済ませると、恒例の椎名老師の典座教訓の御提唱を拝聴。今から七七〇年前の二四歳の道元禅師に思いを馳せながら、改めて一年半ぶりの参加を有り難く思いました。夕食後、坐禅を二炷。久し振りの坐禅でした。微かに蚊取り線香が漂う夜の坐禅堂の空気は凛として、素晴らしい坐禅でした。大分太ったせいか、何とも体が重かったのですが、御老師の警策に自らの甘さを叩き潰したい気持ちでした。

翌朝五時、起床。朝の坐禅があっという間に終わり、本堂での朝のお勤め。本職のお坊様達のお経が素晴らしいハーモニーとなって響き渡り、小生も大きな声で般若心経を久し振りに唱えました。朝食を済ませ、作務では、中庭の草を一心にむしりました。流れる汗の感触もすっかり忘れていたものでした。作務が終わり、皆で一息入れながら、御老師から修行中に応量器を単から落とそうものなら、即、下山という厳しい永平寺でのお話を聞いたり、森岡さんに「禅は凄い。徹底して作法が定められており一切の無駄がない。完璧なものを今でも伝えているのに、刀工にはそれが無い。本当に大変だ。」とのお話などがありました。又、今回はじめてお目に掛かったのですが、電話で、被災されたお知り合いの安否を尋ねてこられた佐野さんなどと震災の話をしました。坐禅後昨日にひき続き、椎名老師の典座教訓の御提唱を聞き、昼食を戴きあっという間の一泊参禅会が終わりました。

今回の参禅会で、うまく言えませんでしたが、皆様が神戸の震災を心配していてくれていて本当に有り難く思っております。現地では、正直なところ何をどうしていいのか分からないのですが、只、今を一生懸命努力している姿だけがあります。震災直後、荊妻は、全国からのボランティアの方達の食事づくりを、長田区役所の前の公園のテント村で行っていました。寒さと暗闇が支配している夜でしたが、会社から帰ってから迎えに行くとドラム罐の焚き火を囲んで、被災された方、ボランティアの方が静かに話し合っている不思議な暖かい空気が漂っていました。人が生きるとは何か―人が大切に思って、長いあいだこだわって貯めた大切な宝物、家、本、想い出の一杯詰まった懐かしいアルバムなどの全てが一瞬にしてごみになり、離れ難い最愛の家族が目の前で亡くなっていった現実を前に、人は語ることを止め、黙々と身体を動かしています。悲しみも苦しみもはなれて、再び生きることに三昧している人達。同情は不要です。自分たちが自ら立ち向かっている真剣勝負の場に同情は要りません。でも理解はしてあげてほしいのです。彼らは彼らのやり方で悪夢の様な現実に立ち向かっていることを。

でもその中で、どうしても自立できない人達がいます。それは、社会的弱者と言われている老人や精薄の人達なのです。長田は神戸市でも一番老人が多いのですが、長田を愛している老人を山里離れた官僚好みのコンクリートの箱の中に閉じ込めるお仕着せの福祉を嫌い、家の近くの古い家屋で、自分たちで自分たちのお年寄りを介護する―そんな自立心の旺盛な人達が長田にはいるのです。これは「こまどりの家」といって最近漸く社会的にも認知されるようになった小さな施設ですが、震災で豆腐屋、クリーニング屋などからの仕事が無くなった近所の精薄の青少年の面倒もみることになり、経済的にも余裕がなくなっています。この施設に、四月ぐらいから妻はボランティアに行っていますが、皆様の暖かいお志は、現在この弱者の人達の役に立てさせて頂いております。本当にありがとうございます。

合掌



日本一の可睡斎東司

真摯な旅

四街道市　大坂　昌宏

六月一七日、三〇年ぶりのバスの旅。あの頃は、よく飲み、戯けたものだった。今日は可睡斎へ一泊参禅の旅。風化した当時を偲びながら、「真摯な旅」へ想いを馳せる。

一五時、上山。三〇分後、「典座教訓」を御指導いただく。「一二三四五」、道元禅師二〇代のカルチュア・ショックの説話。真理を生き、真理を行じることの厳しさを悟るエピソード。

一七時、薬石。「五観の偈」を唱和し、食事作法を学ぶ。「典座教訓」といい、禅にとって「食」もまた、真剣勝負だった。

一九時、二炷。間に、国宝といわれる「普勧坐禅儀」を唱和。諸縁放捨できず、雑念去来するばかり。また、人参がでたら、彼どうするだろう……。今度こそ食べてあげよう。

二一時、開枕。大きな襖に、四季の花々が繊細に描かれている。部屋も大きく、大きな夢も見られそうな、心安らぐ静かなる空間。

翌朝五時起床。三〇分後一炷。続いて朝の勤行。昨夜、言葉を交わした少年のような僧侶さん、コックリしている。まだ二ヶ月余りと聞く。初心者同志、互いに精進しましょう。またお会いしたい。

七時、作務。境内の清掃を受け持った。学童疎開で、山寺の清掃をしたことがある。注意されながら、一生懸命だった。当時を偲びながら、丁寧に掃いた。玉砂利の吸殻は手で拾うしかない。三〇本以上はあった。かって、自分もそうだった。

何度か「牡丹園はどちら?」と声をかけられた。作務衣を着て、草鞋をはいていたからだろう。何故か楽しい気分だった。

八時、小食。作務の後の食事は、格別の味だった。沢庵漬で応量器を濯ぐ。節水と省力のアイディア?とひとり感心している。

九時、一炷。一〇時、「典座教訓」を続ける。ますます含蓄味を増してくる。典座の役は、師と仰がれるほどの僧の役職ということを知る。まさに佳境に入らんとす。

一一時、一炷。結跏趺坐、またしても臑がしびれてくる。組みなおせばいいのだろうが、気おくれがする。もうじき鳴るだろう。坐禅は「悟り」への王道といわれている。こんな状態では、まだまだ遠い遠い先のこと。しかし一朝一夕でなんて、夢みたこともない。ただ、ただ坐り続けたい。

一二時、中食。黛さん、「人参でるかな…。」人参のことを考えると、食欲もなくなるようだ。しかし、眼前にあったのは、鮮やかな朱塗りの食膳。整然と盛り付けされた、彩色豊かな精進料理。人参は、黛さんの祈念に負けたようだ、影もない。雑念を払ってひたすら料理するのが、精進料理と聞く。今回は作法不問とのことだが、却って緊張する。心して一品一品を、賞味させていただく。

一三時、帰路につく。思えば、昨日からの体験、どれひとつをとっても貴重な体験だった。

かって、「寺院」といえば観光者の立場の私に、正しく、「道場」だということを如実に示唆してくれた。

この事象は、参禅初心者の私に、ますますの研鑽の要を教えてくれた。真摯な「心」の旅をありがとう。

椎名老師はじめ、諸先達の皆様心よりお礼を申しあげます。

合掌

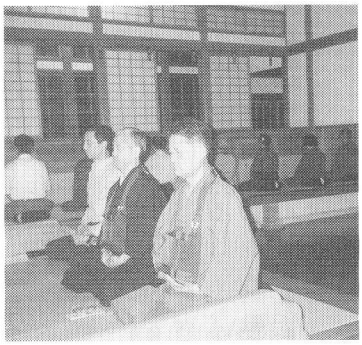
可睡斎一泊参禅報告

船橋市　森岡　俊雄

私は六月一七日柏市役所前を九時一五分に出発し、上山は午後三時。三時半から御老師より典座教訓の御指導があり、夕食後坐禅。普勧坐禅儀をお唱えいたしました。私には坐禅は習禅に非らずという所が解りません。この所は曹洞禅の原理・原点でありましょう。ですから教えられた通り何も考えずに坐ります。

典座教訓もあまり解りませんが、坐禅は習禅に非ずというのが一番解りません。典座教訓は実践のない仏道は駄目という意味も含まれてると思います。私は無学文盲平たくいえば明き盲でして文章も書けません。唯椎名老師に戴いた明珠有掌の額を見ると仕事の疲れが取れます。参禅が長いばかりで能無しの私です。年も年ですから宜しくお願い申し上げます。御老師はじめ幹事の方々にはご苦労様でした。

お陰様で私は酔った様に行って、夢の様に無事帰る事ができました。ありがとうございました。



可睡斎での坐禅

龍泉院参禅会簡介

一、日　時　毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐　禅　止　静　鐘　三声　坐禅
　　経　行　鐘　二声　経行
　　放　禅　鐘　一声　放禅

一、講　義　木版三通　開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
　　講　師　龍泉院住職　椎名宏雄老師
　　平成六年度七月より「古鏡」の巻を提唱

一、座　談　自己紹介の後、茶を喫し座談
　　正午解散

一、参加資格　年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会　費　無料

一、成道会坐禅
　　月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月三日）
　　釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（　）中は座談の司会者。

●四月二三日　二八名
　坐禅作法復習／坐禅開始前
　筍　堀　り／坐禅・禅講後
（宮内　守氏）

●五月二八日　三五名
（樋口　徹生氏）

●六月一七日～一八日
　一泊参禅会　二四名
　於　可睡斎／静岡県袋井市
　幹事　五十嵐嗣郎氏
　　井之輪　進氏

●六月二五日　二八名
（佐野　明子氏）

●七月二三日　三二名
（藤原　公氏）

●八月一六日
　龍泉院施食会
　一一名の会員が作務奉仕
　法話　中野東禅老師

●八月二七日　二七名
（杉浦上太郎氏）

●九月二四日　一六名
（宮田　哲男氏）

▼四月は坐禅・禅講終了後、例年どおり龍泉院裏山での筍堀り。無心の一時と旬の美味を頂戴したこと平素に重ねて只管感謝。

▼暫く病気療養中であった政安さんが五月の参禅会から元気に復帰され、会員一同の喜び。

▼施食会での中野東禅老師の法話。今年は観音様。全ての事象に慈悲の心で接することの大切さを諄々と諭される。同老師は毎年の法話で一貫して夫婦・家族・親しい人々との関わりで、つい気を抜き意識の外となることを厳しく戒められる。

▼在家の修行に限界有りや否や。凡夫が日常時派生する疑問であるが、可睡斎一泊参禅会における椎名老師の禅講で霧散した。「典座教訓」二六段目のご提唱で霧散した。日常時こそ行機会。

▼日常の事件を見聞するにつけ、心が病んでいる現代を痛感する。金や物を中心とした自由と平等理論での秩序に限界有りと思う。「自然と人間の生活」「社会倫理とこころ」を最大の価値基準とした新しい秩序の出現熱望。

▼椎名老師は、一〇月～三月までよみうり文化センター（柏そごう）にて講座「良寛の詩を読む」を広くご指導される。

▼来年は当参禅会発足二五周年。今幹事各位が記念行事を検討中。中国仏蹟を訪ねるツアーも企画中との由。乞うご期待。（杉風記）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116－45　☎0471(43)3131